中国新聞　2007/7/24(日)

文化

緑地帯

高遠　信次

幕末の岩国　⑥　高杉晋作来たる

七卿を長州へ連れて来た吉川経幹は、毛利慶親に呼び寄せられて山口に向かい、政事堂にて善後策を協議するが、何ら結論の出ぬまま岩国へ帰還する。

ところがその経幹を、慶親の親書を携えて高杉晋作が訪れる。高杉は奇兵隊初代総督を解任（在任期間は二カ月半）されたが、知行百六十石を給せられ、奥番頭役へ任じられていた。

高杉は菓子と鰯一箱を慶親からの見舞いの品として持参し、経幹へ拝謁を求めた。だが経幹は持疾を理由に高杉に会おうとしなかった。それは高杉が兵一千人を率いて進発し、大和行幸に乗じて代官所を襲い、討幕を志した天誅組を支援し、大坂城を攻撃しようとたくらんでいるとの噂や、三田尻（現・防府市）招賢閣にかくまわれていた三条実美へ謁見し、上京供奉を願い出たとの報が岩国へ届いていたためである。

だが慶親の親書は経幹へじかに手渡したいと、高杉がかたくなに主張したため、経幹はやむなく拝謁を許した。

親書の内容は―。「上京一決」と藩論決定を告げ、続けて経幹が上京に「御不審」なのは承知している。しかし「十八日の変は全くその節に詰め合わせの者の越度とは思い申さず候に付き、不束ながら取調べの儀はまず一応申し立て置き、丹誠を尽くし、闕下（天子の御前）に伏し、七卿御帰落、朝政御改復を願い奉るほか他念これなく」と、堺町御門警衛解任について経幹ら関係者の責任は問わないが、申し開きのために上京する。ついては上京と弁明の「その策略等の儀、精密にこれ無くては上京も相成り難きにつき、その辺のところを御相談に及びたく」、少しでも病が癒えたら「一日も早く」山口へ来てほしいというものであった。

慶親の親書は残っているが、経幹と高杉が何を語り合ったのか記録されていないのが、実に残念である。

（第39回中国短編文学賞第3席受賞者＝広島市）